

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 ☆幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第44号 2006年4月10日(月)

発行：歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)



▲「指定管理者制度と歴史系博物館」
勉強会の模様
(2005年12月18日撮影)



▲源平シンポジウムの様子(2005年6月18日撮影)

目次

◆◆特集 1◆◆

「歴史系博物館と指定管理者制度」勉強会の記録

「指定管理者制度と歴史系博物館」の勉強会に参加して 佐々木和子・・・2

「芦屋市立美術博物館に関する報告」
柿木 央久・・・3

◆◆特集 2◆◆

「地域史卒論報告会」の記録・・・・・・5

「兵庫津・御馳走場の空間構造—宝暦度の朝鮮通信使来朝史料を中心として—」

安藤 美保・・・6

次

「伊丹酒造家小西家の経営構造—酒造業・大名貸・江戸下り酒問屋を軸に—」

内田 美咲・・・6

「都市青年会と町運営の変容過程—姫路市を事例として—」

森本 泰弘・・・7

シンポジウムの記録 源平シンポジウム

源平合戦 ～伝承された戦いの虚実～

「『神戸源平シンポジウム—源平合戦—伝承された戦い』に参加して」

山本陽一郎・・・9

◆◆特集1◆◆

「歴史系博物館と指定管理者制度」勉強会

【勉強会の記録】

- ・日時：2005年12月18日（日）午前1時～5時
- ・場所：芦屋市立美術博物館講習室
- ・趣旨説明：奥村弘氏（史料ネット代表）
- ・報告：明尾圭造氏

「芦屋市立美術博物館の現状と課題」

- ・コメント：河崎晃一氏、佐々木和子氏、
大国正美氏、森下裕之氏（NPO法人芦屋ミュージアム・マネジメント理事）
- ・参加者：15名（スタッフ含む）



▲報告者の明尾圭造氏

「指定管理者制度と歴史系博物館」の勉強会に参加して

佐々木 和子

近年「指定管理者制度」によって、博物館・資料館をめぐる状況は、大きく変化している。しかも、あまり、「指定管理者制度」について、よくわからないうちに、歴史系博物館、資料館でも事態がすすんでいるようである。2005年11月におこなわれた全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）福井大会でも、歴史資料館が、

「文書館運営の新局面—広く県民に活用される歴史資料館をめざして—」と題し、教育委員会文化課の所管から、財団法人岐阜県教育文化財団を指定管理者として管理運営されている様子が報告された。

昨2005年12月18日、芦屋市立美術博物館（以下芦屋美博）で、史料ネットによって、「指定管理者制度と歴史系博物館」の勉強会が開かれた。筆者は、神戸大学文学部地域連携センター（以下地域連携センター）から、地域連携研究員の立場で参加した。地域連携センターでは、指定管理者問題は、芦屋美博の休館問題、芦屋の地域歴

史資料保存の危機という所から関心を寄せていたのである。

2003年11月、突然芦屋美博は「2006年民間に委託、委託先がみつからない場合は休館」という、芦屋市の方針が発表された。同館は、プールや体育館などとともに、芦屋市文化振興財団による管理がおこなわれている施設であった。しかし、市は財団解散をおこなうつもりで、他の自治体のように、財団への指定管理者への移行は全く考えていなかった。そこで美術館、博物館運営のためにNPO法人を立ち上げ、そのNPOによる指定管理者制度への模索がはじまった。

NPOが指定管理者制度となり、地域の歴史資料の保存をおこなう。今まで考えられたことのない出来事である。また、このNPOが2006年春に指定管理者となるためには、2005年9月には市議会によって指定管理者として議決を受けておく必要があった。そのためには、その前の7月にはNPOの

認証が必要と、日程だけが先に決まり、なかなか実態がついてこれていないように見えていた。

2005年9月、NPO法人 芦屋ミュージアム・マネジメント（以下AMM理事長 角野幸博・武庫川女子大教授）が設立された。芦屋美博は、市直営とし、NPOに業務委託されることとなった。このNPOは、



▲コメンテーターの佐々木和子氏（=右）

現時点では事業実績がないため、指定管理者とはせず、当面は業務委託という形で館の運営をまかされることになった。今回の勉強会では、このAMMのような内容で委託を受けているのか情報交換をおこなおうとした。ただ、その時点では、あまり詳細な詰めができておらず、継続して見守っていく必要性が確認された。

この一連の出来事によって、地域の歴史資料保存での行政の役割、専門家の役割、市民の役割を改めて考えることとなった。今後も何度もこのような勉強会の開催が必要だと思う。

（ささき・かずこ

神戸大学文学部地域連携センター研究員）

芦屋市立美術館に関する報告

柿木 央久

芦屋市では、平成十八年度以降、指定管理者制度により市立美術館を民間委託する方針で模索してきました。十七年秋に市民ボランティアによるNPO法人「芦屋ミュージアム・マネジメント（AMM）」が設立されたことを受けて、AMMを指定管理者とする方針で協議が進められてきましたが、実績のない組織に公共施設を丸ごと委託することは問題があるとの国からの指導を受け、当面は業務の一部を委託するという建前による「市直営」として運営されることになりました。

「芦屋市立美術館」の英語の名称は Ashiya City Museum of Art and History、すなわち「芦屋市立歴史美術館」ということになっています。芦屋市内で発掘された遺跡からの出土品や、市内に残されていた中世

の古文書など、歴史的収蔵品も豊富で、市内の小学校への教育普及など市立美術館の活動の柱のひとつとなっています。

本来「美術館」は「博物館」の一部にすぎません。それは「美術品」とされるものを収集し、分類整理し、展示する教育的施設であり、それら収集品についてそれがいったい何であり、どういう意味を持つのかを研究する施設でありましょう。その結果として、それぞれの美術作品や作家に対する「評価」が生まれてくる点で、歴史系であれ、美術系であれ、生活に根ざしたものであれ、「博物館」としての役割は同じはずです。

ところが「美術」においては、どうしても論じる者の「趣味」や「好み」が前面に出されがちです。美術論・芸術論には、端

的に言えば論じ手の主観や趣味をいかに説得力を持たせて論じられるかという性質があるだけに、えてして「はじめに評価ありき」「わかる人にだけわかればいい」といったことになりがちです。芦屋市立美術館でも従来その傾向は強くあり、その結果として市民の足を遠ざけたり、ともすれば「歴史博物館」でもあることが忘れられることになったりしていたのではないかと思います。

そこで、AMMでは市立美術館受託に立候補するにあたり、この館が目指すべき役割について議論を重ね、「芦屋市民に支持される館運営を実現する」ために、「はじめに評価ありきをやめ、館藏品について評価を整理し、学芸員個人の「好み」を排し、事実にもとづいた解説を充実させること」として歴史系と美術系に一貫性を持たせる方針を固めました。館藏品それぞれへの評価は、そうした作業を踏まえた後にくるものと考えます。

協議の過程で、こうした方針は市の希望ともかなり一致することや、今回残留する学芸員の希望とも一致することがわかってきました。「市」の博物館に求めることについて、市民と行政、職員の間にはほぼ乖離はないものなのではないかと感じています。

むしろ難しいことは実務的な部分です。役所というものが本来的に「決められたことを実施する」組織であることを考えれば当然かもしれませんが、「責任」と「権

限」が表裏一体であること、実務を進める上でそれぞれの範囲を明確にして「決裁」をしてゆく必要があること、の認識が役所には欠落しているに乏しいように感じられてなりません。

事実、これまでの協議の過程でも、委託に際する「権限」の範囲がなかなか明確にされず、そのうえ市側にはどの職階にも明確な決裁権が存在しないために、物事を決めてゆく上で万事いたずらに時間を要し、限られた時間の中でやむなく首長にじかに決裁を求めることも一度となくあったなど、無用な苦勞を強いられているのが実感です。

芦屋市の場合はAMMへの「業務委託」は将来の指定管理を念頭においての経過的措施ということですが、実務的な協議を進めるにつれ、どちらの制度も制度上大いに不備があることが今後の最大の課題であるように感じています。

(かきのき・てるひさ

芦屋ミュージアム・マネジメント理事)



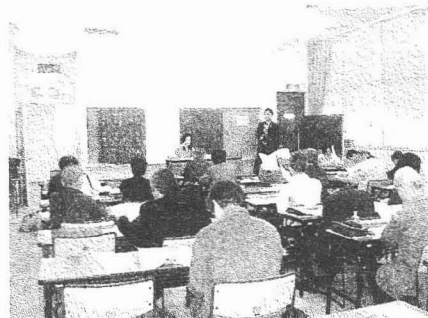
▲コメンテーターの森下裕之 AMM 理事

「地域史卒論報告会」

このたび、歴史資料ネットワークと神戸史学会は、おもに兵庫県や大阪府などの地域を対象にした地域史をテーマにした卒論の報告会を企画しました。

歴史資料ネットワークは、阪神・淡路大震災の被災史料の救出を当初の目的に結成されました。現在は、史料を保全する取り組みを通じて、地域遺産や史料を大事にする社会そのものの構築を進めることに重点を移し活動しています。このような社会の実現には、市民社会のなかに、私たちの趣旨に賛同して支援してくれる人たち、サポーターの輪をさらに広げていく必要があると思います。そのために史料ネットでは市民講座などを開催し、市民との価値観の共有を進めてきましたが、同時に歴史系の大学で勉強し社会に出た学生が、社会人になって以降も、こうした運動や調査にもう少し関わってくれたら、状況はもっと好転するのではないかと考えています。

今回からスタートした新企画「地域史卒論報告会」は、まず大学生と市民社会をつなぐべく、大学で学んだことを市民の皆さんに聞いていただく場として設けさせていただきました。大学院に進学すると様々な発表の機会がありますが、進学しない学生の場合はこうした機会は少ないのではないかと思います。“研究発表会”などという堅苦しいものではなく、気楽に成果を語ってもらい、市民からの感想を聞いたり情報を提供しあう場になればと考えています。さらには、大学院に進学する学生はもちろん、進学しない学生にも発表の場を設け、内容を神戸史学会発行『歴史と神戸』などの誌上で活字化する機会を与えることも計画しています（編集部）。



【勉強会の記録】

- ・日時：2006年3月5日（日）13～17時
- ・場所：六甲道勤労市民センターE会議室
- ・報告：安藤美保氏（神戸大学文学部）

「兵庫津・御馳走場の空間構造—宝暦度の朝鮮通信使来朝史料を中心として—」
内田美咲氏（神戸大学文学部）

「伊丹酒造家小西家の経営構造—酒造業・大名貸・江戸下り酒問屋を軸に—」
森本泰弘氏（神戸大学文学部）

「都市青年会と町運営の変容過程—姫路市を事例として—」

【参加記】

兵庫津・御馳走場の空間構造—宝暦度の
朝鮮通信使来朝史料を中心として—

安藤 美保

私の報告は兵庫津の御馳走場について、その概念が非常に曖昧な点から明確化を図ろうとしたものである。概略としては実質的に朝鮮通信使を接待・宿泊させる場である御馳走場の兵庫津における位置確定を行い、しかしながらその御馳走場空間は兵庫津のほかの地域の支えなくてはならないために、兵庫津全体を御馳走場とする概念をも生み出したとするものである。

卒論報告会においては、興味を持って頂けないのではないかという不安があったのだが、それは大変な杞憂で驚くばかりに質問が返ってきた。こちらがたじろいでしまうほど内容に明快に切り込んだもの、逆に経験上からの素朴な疑問を投げかけられたりなど様々だった。しかし驚嘆に値するのはこうやって質問をしようという興味・関心を市民の方々が大学生に持たれていたということである。地域は大学を見ている。そう思わせられる報告会であった。来年に継続されることを期待したい。

(あんどう・みほ

神戸大学文学部4回生)



▲安藤美保さん

伊丹酒造家小西家の経営構造—酒造業・大名貸・江戸下り酒問屋を軸に—

内田 美咲

近世伊丹酒造家小西家の経営の総体的把握を課題とする。第一章において大名貸研究の問題点を指摘。第二章で秋田藩の事例を挙げ、江戸店が大名貸に関与していることを明らかにした。また、酒造業と大名貸は季節的・金銭的な棲み分けが可能であり、資本を循環させるのに有利なことが分かった。第三章において江戸下り酒問屋について考察を加え、伊丹本家と江戸店の関係を明確にした。それは本家による直営店経営であり、本家が江戸店を掌握している様子を明らかにした。以上のことから、酒造業・大名貸・江戸下り酒問屋が有機的に結合していることを示した。

今回の報告会で、一般市民の方の地域史への関心が非常に高いということを感じた。地域史はその土地に住む方に還元していくべき分野だと思うので、学内に閉じこもることなく、一般の方の声を聞き、研究内容に反映させていきたいと思う。

(うちだ・みさき

神戸大学文学部4回生)



▲内田美咲さん

都市青年会と町運営の変容過程—姫路市を事例として—

森本 泰弘

第一章では姫路市の青年団が大正期には低迷し、単なる冠団体に過ぎなかったのが、昭和期に入ると活性化することを明らかにした。しかし、その理由が不明なためその青年団を構成する町の青年会を明らかにする必要があったと考えた。しかし、町の青年会は町によって設立され、町運営とは切っても切り離せない関係にあるため第二章では町運営と総代について考察した。日露戦後の都市化とそれに伴う市行政の肥大化に伴い、町という単位が見直され、さらに町総代に市政を補完し、地方改良運動を行う主体として期待された。しかし、「大正デモクラシー」という時代背景もあり、町総代は市政を補完する存在ではなく、市政を動かす存在となった。そして大正後期には各町が（小学校区を単位として）連合することとなった。そして、第三章ではこのような町運営によって創設された町青年会がいかなる存在であり、何故上部機関である青年団へと参加していくのかを考察した。青年会は町内の円満のために創設された。そして、町運営の煩雑化により町運営に参加し、町に認められ、自己の資金を得た。

そして、町からはある程度独立し上部機関へと参加していった。この背景には大正末期の各町の連合も大いに関わっていた。

（感想）

市民の方々から様々な意見を拝聴することができ非常によい経験になりました。中には戦前の青年団に所属されていた方もおられ、原体験に触れられたようで非常に参考になりました。地方史は市民の方々との協力はなしでは発展し得ないものと思います。市民の方々の意見を参考にしながら、地方史から近代日本社会を描き出せるように精進してまいりたいと思います。

（もりもと・やすひろ

神戸大学文学部4回生）



▲森本泰弘さん

当日は、20人を超える市民の方が報告会に参加し、学生の報告に対して熱心に質問を行っていました。中には鋭い質問も飛び出し、報告者がたじたじとなる場面もありましたが、市民とのやりとりは学生にとっていい刺激となったようです。

報告者が神戸大の学生に偏った点や、開催時期が就職準備期間と重なること、各大学史学科への告知方法などで課題も残りましたが、「大学での勉強の成果を直に知るとても良い機会。今後もぜひ続けてほしい」という参加者の声も多く聞かれました。来年度も引き続き開催する予定ですので、皆さんのまわりにいらっしゃる来年卒業予定の学生さんを是非ご紹介ください。このニュースレターを読んでくださっている学部生の皆さんも、市民の皆さんの前で報告してみませんか？（編集部）

源平シンポジウム

源平合戦 ～伝承された戦いの虚実～

大河ドラマ「義経」ブームで脚光を浴びている中世の合戦ですが、伝承や物語のロマンが先行している観は否めません。神戸市を舞台とした合戦を素材に、近年の中世の戦争、武士像、内乱などの研究成果を市民のみなさまに提供し、史実や地域遺産に対する関心をより一層高めていただくことを目的として、歴史資料ネットワークは、兵庫区民まちづくり会議・兵庫区役所との共催により、2005年度市民講座「源平シンポジウム 源平合戦～伝承された戦いの虚実」を企画しました。

【シンポジウムの記録】

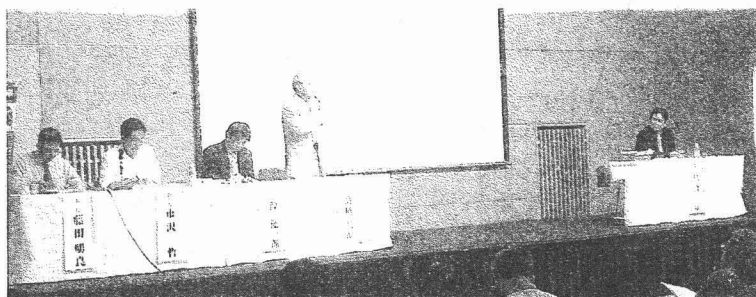
- ・日時 2005年9月25日(土) 13時～16時45分
- ・場所 神戸市水道局たちばなセンター
- ・スライド 「神戸源平史跡の今昔物語」
神戸大学大学院 山本陽一郎氏
- ・基調講演 「源平合戦の虚像を剥ぐ
——生田森・一の谷合戦を中心に」
東京都立大学人文学部助教授 川合康氏
- ・パネルディスカッション 「内乱史研究の最前線～武士、伝承、地域社会」

パネラー	東京都立大学人文学部	助教授	川合 康氏
	神戸大学文学部	教授	高橋昌明氏
	四天王寺国際仏教大学人文社会学部	助教授	源 健一郎氏
コーディネーター	天理大学国際文化学部	教授	藤田明良氏
	神戸大学文学部	助教授	市沢 哲氏

- ・主催 歴史資料ネットワーク、兵庫区民まちづくり会議、兵庫区役所



講演者の川合康氏



▲パネルディスカッションの様様

自分が神戸大学の大学院で主に研究の対象としているのは、『平家物語』などで活躍する中世武士・中世武士団である。そのような自分の専攻の関係から、先日（2005年9月25日）行なわれた歴史資料ネットワーク主催の「源平シンポジウム」に参加させていただいた。参加すると言っても、もちろんこのシンポジウムに参加される諸先生方のように講演という形ではなく、自分は『平家物語』で描かれた治承・寿永内乱の足跡を、スライドを通して紹介することであった。

この合戦に関しては、神戸市内が源義経の鶴越で有名な「生田の森・一の谷合戦」の舞台となったため、その合戦に関する史跡（主に碑など）が同市内に多く存在している。それらの史跡の多くは、もちろん源平台戦当時のものではなく、近世などに作られたものであるが、この合戦で多くの平家方の武将が戦死したことを物語っている。自分は、シンポジウムの当日に川合康先生（東京都立大学助教授）の講演の前座として、これらの史跡のスライドを使って、『平家物語』（時には『大河ドラマ・義経』も）のストーリーと絡めて、今回のシンポジウムのテーマである「生田の森・一の谷合戦」に関して説明させていただいた。

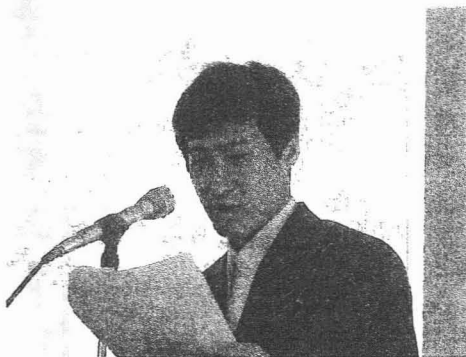
川合先生は、『平家物語』の生田の森・一の谷合戦で定番となっている「源義経の鶴越」というものは、本来はこの土地の地理に明るい武士達（具体的には多田行綱）が行なった奇襲攻撃で、それが都に伝聞される段階で、この奇襲攻撃の主体が、源氏軍の大將であった源義経に変換されたのではないかと、またその都において、義経が活躍したという伝聞の情報が後に『平家物語』に吸収されたのではないかと、ということ指摘された。この話を聞いて、従来イメージしていた義経像や生田の森・一の谷合戦のイメージが壊されたのは言うまでもなく、この指摘は中世史や国文学の両ジャンルにとって大変興味深い話だったと思う。

自分は、スライド作成を通して、今回の源平シンポジウムに参加させていただいたが、『平家物語』や歴史小説・大河ドラマなどの影響で、固定化されたイメージが、そのまま現代まで受け継がれているという事実には、歴史学を専攻するものとして、史実とフィクションとの関係などをあらためて再認識させられた。特に今回自分は、スライド作成のためにこの合戦に関する史跡を巡ったが、多くの平家方の武将が戦死していった墓碑などを見るにつけ、このよう

な既成の歴史像によって造られた史跡と地域史の関係を今後どのように構築していくのかも、これからの課題だと思った。また『平家物語』の時代を専攻する自分にとっても、このシンポジウムに参加していろいろ考えたことを、今後の自分の勉強にも活かして行きたいと思う。

（やまもと・よういちろう

神戸大学大学院修士課程2回生）



▲スライド説明を行う山本陽一郎氏



源平合戦について専門家が持論を出し合ったパネルディスカッション。市水道局たちばな職員研修センター

パネルディスカッション

兵庫区役所などの上る二の谷合戦の舞台となつた深い神戸。当時の資料から通説と異なる見解を提示し、通説とは違った歴史観を提示する。この日は、東京都市立大学の川合康助教授が基調講演。二の谷合戦が地域社会の関係について触れ、一戦には逆巻くとして述べた。源義経を英雄視する向きがあるが、それを支えたのは地元の武士同、源氏の勝利は、上地助のある彼らが義経を保護した結果であり、地域の歴史として理解すべきだなどと訴えた。

横田良平

源平時代を神戸からひもとく 地元武士の意義解説

歴史ロマン愛好家ら魅了

中央区でシンポジウム

「日本大河ドラマ『義経』の放映で注目が高まった源平時代。現代にも受け継がれる通説の歴史を真実に迫るシンポジウム「源平合戦」伝承大会が、25日、中央区通運三、市水道局たちばな職員研修センターで開催された。中世史の専門家が持論を語り、歴史愛好家ら約300人が熱心に耳を傾けた。



▲ボランティアによる出石区有文書固着展開作業 (2006年2月23日撮影 於神戸大学)

足交換。神戸大学の高橋内乱になった」など語った。高橋教授は、源平の争いし、会場で話しきりにうは、地域の歴史を巻き込みたい。多く人の姿などが見られ、地元武士が加わった。地城社などについて感想したから、三つ全体的な。

【編集後記】 出石区有文書固着展開作業ボランティアの募集！

上記の写真にありますように、史料ネット事務局では、2004年の台風23号で水損した出石町日野辺区有文書のうち真空凍結乾燥済史料の固着展開作業（フリーズドライ後くっついたページをめくる）・クリーニング作業（史料に付着した泥をとる）・仮目録をとる作業などを行っています。その後、史料を日野辺の皆さんにお返しする予定となっています。ご協力いただける方は、事務局までご連絡ください。よろしくお願いたします (M)

史料ネット NEWS LETTER No.44 2006年4月10日発行
 編集・発行 歴史資料ネットワーク
 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
 神戸大学文学部内 史料ネット
 TEL&FAX:078-803-5565 (開室時間 平日の午後1時～5時)
 URL:<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/> e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp